

コロナ禍の大学生における、オンライン通話時の カメラ有無による伝わりやすさの検討

—伝達感と伝達度の観点から—

○平川文恵・田中秀樹・井鈴木佳奈

(広島国際大学大学院心理科学研究科)

問題

コロナ禍によって、大学ではオンライン授業が行われた。オンライン授業で学生はカメラをオフにしがちだが、オンにすることを求められることも多い。発言者の顔が見える方が、情報はより伝わりやすいのだろうか。

伝達感とは「互いに情報を正しく共有できていると感じているかどうか」、一方、伝達度とは「話し手の発話内容が、その意図通り、正確に相手に受け取られたかどうか」を表す(杉谷,2010)。さらにメッセージの内容は「感情的情報」と「道具的情報」の2つに分けられる。感情的情報伝達とは「話し手が自分の感情を相手に伝えようとするようなメッセージ」で、それに対し、道具的情報伝達とは「自らの感情が無関係な客観的事実などを伝えようとするコミュニケーション」である(杉谷,2008)。本研究では、上記2種類の情報についての伝達感と伝達度を検討する。

方法

同意を得られた大学生・大学院生 28名(各群 14名 7組)を 2人 1組にし、カメラオン群とオフ群に分けた。Microsoft Teamsにて、一方を話し手、一方を聞き手にして「最近読んだ本、見たアニメ・映画等のストーリーがある作品」について5分間対話させた。その後アンケートに回答させた。

伝達感に関して、感情的情報伝達は「気持ち・感情がきちんと伝わった(伝わってきた)と思いますか?」、道具的情報伝達は「作品の内容やストーリーがきちんと伝わった(伝わってきた)と思いますか?」の2項目を評価してもらった。

伝達度に関して、感情的情報伝達は「その作品を気に入っている」「その作品を悲しいと思っている」といった10項目に回答を求めた。道具的情報伝達は「作品のタイトルは何ですか?」「物語の序盤は主人公はどんな状況・状態ですか?」といった10項目に回答を求めた。なお、実験は所属大学の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

結果

感情的情報伝達において、カメラオンの時の方が伝達感が高くなる有意傾向があった(図1)。一方、伝達度は、道具的情報伝達・感情的情報伝達の両方で有意差がなかった。つまり、カメラオンでもオフでも伝わりやすさは同等であった。

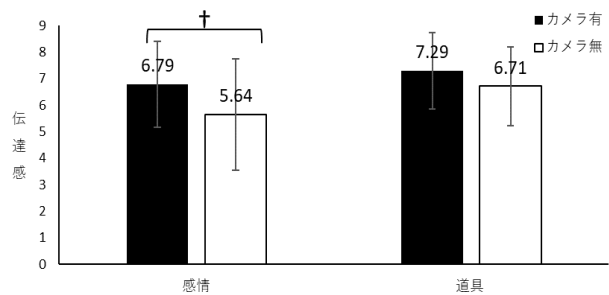


図1.カメラオン群、オフ群における伝達感の比較

※ † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

考察

伝達度について、2つの群の違いは、視覚的な非言語コミュニケーションの情報が利用できるかどうかである。大坊(1998)は、非対面場面は対面場面に比べて「無意図的、感情的な機能を主に担う非言語的コミュニケーション手段が少ないので、相手との間にある話題自体の吟味への関心が集まり、相手の言動の意図を敏感に把握しようとする傾向が強くなる」と指摘している。視覚的な情報があってもなくても聞き手が言語情報に注意を向けて理解しようとするれば、話し手が話す内容は十分に伝わる事が示唆された。

引用文献

杉谷陽子(2008).電子メディアによる情報伝達の研究.一橋大学.東京

杉谷陽子(2010).インターネット・コミュニケーションと対面コミュニケーションにおける情報の伝わり方の差異についての意見書<http://202.214.216.10/jp/singi/it2/kaikaku/dai3/siryu3_2_2.pdf>(2021年8月15日)

大坊郁夫(1998).セレクション社会心理学一人は親しみをどう伝えあるか——サイエンス社